

# 恵解山古墳

— 第11次調査の概要 —



2011

長岡京市教育委員会

編集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

# はじめに

国史跡恵解山古墳は、長岡京市の歴史や文化を理解する上で重要な遺産であるとともに、乙訓地方における政治的社会的成立や、大和政権との関わりを示すかけがえのない古墳です。

長岡京市では、この古墳を「歴史とみどり 人の集う 史跡公園」として市民に広く開放し活用するため、平成 17 年度に基本計画、平成 22 年度に基本設計を策定するなど、現在整備に向けての準備を進めています。また、この整備を進めるにあたり、これまで 12 回に及ぶワークショップを実施し、保存・整備後の活用についての意見を拝聴してまいりました。今年度に、その結果をワークショップ参加者手作りの紹介パンフレットとしてまとめ、市のホームページに掲載しました。

さて、本書では平成 22 年度国庫補助事業として実施しました、恵解山古墳第 11 次調査の成果をまとめました。今回の調査では、東側の造り出しに接続する州浜状の礎敷と水鳥形埴輪が出土しました。また、これまでの調査で確認されています西側の造り出しと前方部との間に溝状遺構が存在することと、その中に埴輪の基部 4 点を検出するなど、古墳を復元するうえで貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご協力を頂きました近隣の皆様方、貴重なご指導、ご助言いただきました先生方、また調査を担当いただきました財団法人長岡京市埋蔵文化財センター等の関係機関に深く感謝申し上げます。

平成 23 年 3 月

長岡京市教育委員会  
教育長 芦田 富男

## 例 言

1. 本書は、平成 22 年度に国庫補助事業として実施した恵解山古墳第 11 次(長岡京跡右京第 1001 次)調査の概要報告である。
2. 現地調査は、平成 22 年 6 月 7 日から 12 月 9 日まで行い、調査面積は 242 m<sup>2</sup>であった。
3. 調査は、長岡京市教育委員会から委託を受けた(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。
4. 表紙は第 1 区出土の水鳥形埴輪である。遺物写真の撮影は(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託した。
5. 本書の編集と執筆は、(財)長岡京市埋蔵文化財センターの中島皆夫が行った。

## 目 次

1 位置と環境	2
2 過去の調査	3
3 第 11 次調査の成果	5
第 1 区	5
第 2 区	9
第 3 区	11
第 4 区	12
第 5 区	12
4 まとめ	14

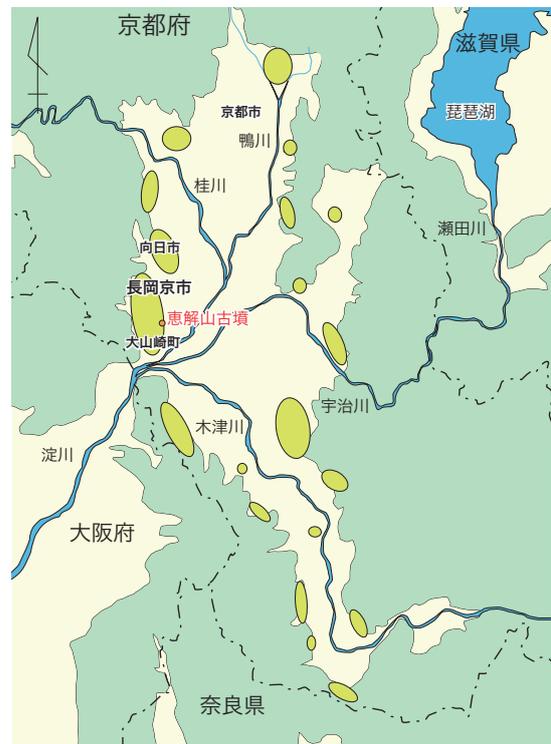
# 1 位置と環境

乙訓地域は、山城盆地の北西部、桂川と西山山地に挟まれた場所にあたる。南には京都盆地から大阪平野へ至る交通の要衝があり、また、かつては盆地中央の巨椋池を介して近江盆地などへの移動も容易であった。恵解山古墳は、乙訓地域の南部域、京都府長岡京市と大山崎町の市町境に近い勝竜寺から久貝二丁目にかけて所在し、J R京都線長岡京駅の南約1 km に位置する。

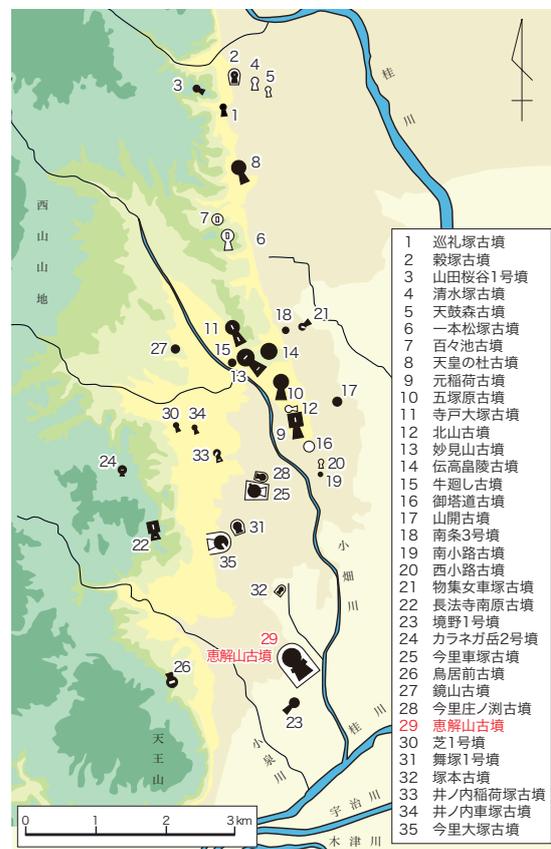
古墳は、北西から南東に向かって緩やかに傾斜する低位段丘の末端に、前方部を南東に向けて築かれている。付近の標高は約16 m前後であり低地に立地することになるが、当地周辺が桂川、宇治川、木津川の三川合流地点に近いことから、交通の要衝を意識して築かれたものと考えられる。

恵解山古墳は、古墳時代中期に築造された前方後円墳で、これまでの発掘調査で全長128 m、後円部の直径78 m、前方部の幅76 mに復元され、桂川右岸域に分布する古墳では最大級の規模であることが明らかとなっている。また、古墳の周囲には幅約25 mの浅い周濠があり、周濠を含めた古墳の全長は約180 mに及ぶ。古墳の南東側には一辺約17 mの南栗ヶ塚古墳が、南西側の調査では埴輪を伴う落ち込みが確認されており、これらは恵解山古墳に従属する陪塚としての位置付けができそうである。

恵解山古墳の周辺には、前期の前方後円墳である境野1号墳があるが、前後する時期の首長墳は存在しない。また、恵解山古墳が築造された時期には、前期からの有力な古墳群である向日丘陵や今里地域における造墓活動が弱まっており、恵解山古墳の性格を窺わせる。



1. 山城盆地の主要古墳群と恵解山古墳



2. 乙訓地域の主要古墳と恵解山古墳の位置

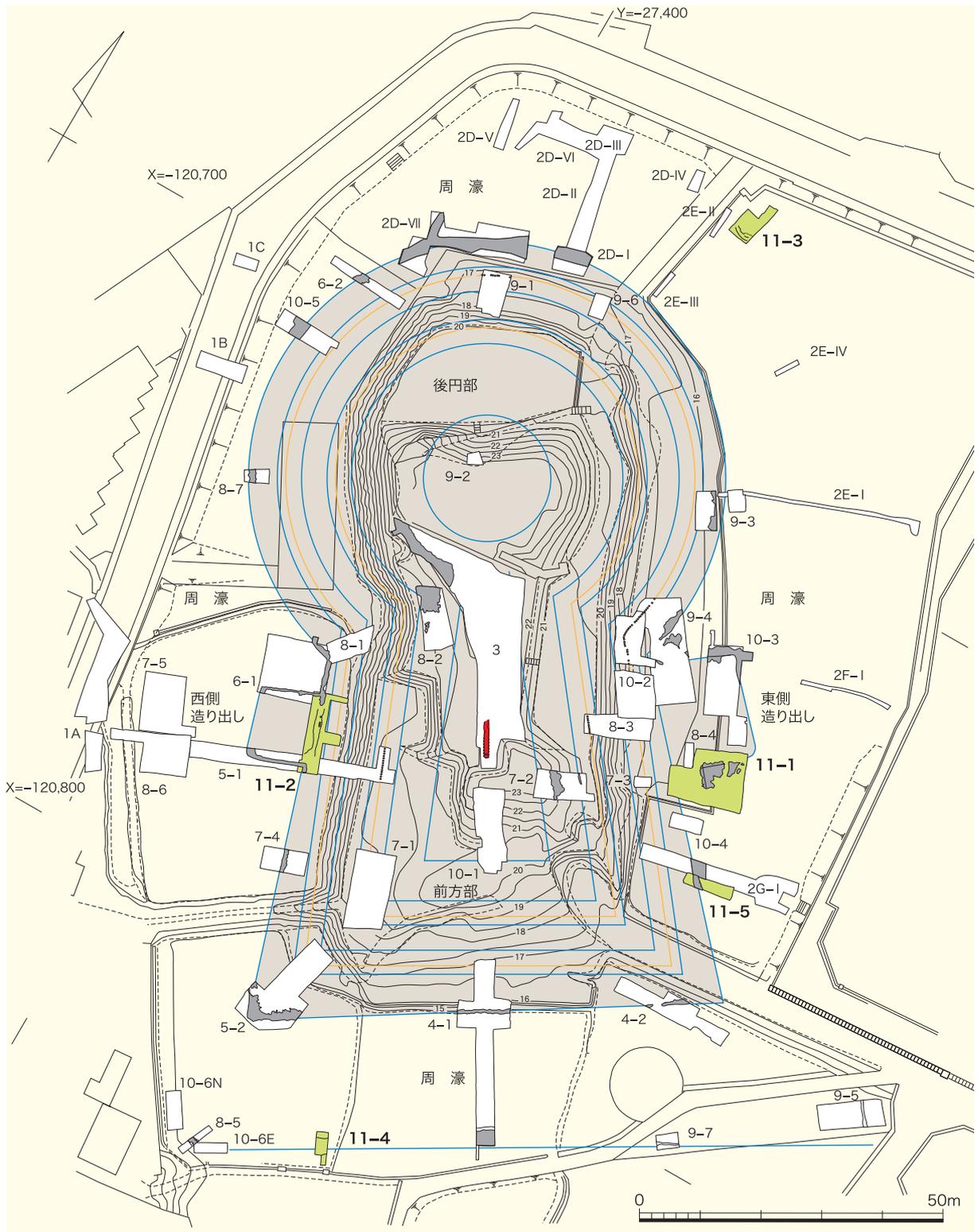
## 2 過去の調査

恵解山古墳の調査は、大正13年の梅原末治氏による踏査に始まり、次いで昭和42年に京都府教育委員会の墳丘測量調査、その後、昭和50年の中山修一氏らによる本格的な発掘調査（第1・2次調査）が行われた。そして、昭和55年、墓地の拡張工事の際に前方部のほぼ中央部から鉄器が出土したため、長岡京市教育委員会による緊急調査（第3次調査）が行われ、鉄製の武器（直刀146点、鉄剣11点、短剣52点、短刀1点、刀子10点、鉄鏃472点）など総数約700点を納めた副葬品埋納施設が発見された。副葬品埋納施設の見つけにより恵解山古墳は昭和56年10月国史跡に指定され、鉄製武器などの出土品は平成11年に府指定文化財の指定を受けている。

平成15年以降の発掘調査（第4次調査～本調査）は、史跡指定地の用地購入が完了し保存整備を行うための基礎的情報を得るためのものである。これまでの7回の調査によって築造当時の形態や東西の造り出しの存在など、恵解山古墳の性格を検討する上で重要な資料が得られている。とくに、第5次調査では西側造り出しと円筒埴輪列が初めて確認され、前方部の南西隅が明らかになるなど、その後の保存整備に伴う発掘調査を行う上でも大きな転換点となった。

### 3. 恵解山古墳の調査履歴

次数	調査年度	主体部	副葬品埋納施設	後円部	前方部	造り出し	周濠	文献
踏査	1924年 (大正13)	・竪穴式石槨の可能性		・葺石と埴輪の存在				府史蹟勝地報告第6冊
分布調査	1967年 (昭和42)			・測量調査による墳形と規模の概要				府概報1968
第1次	1975年 (昭和50)							市報告書第2冊
第2次	1976年 (昭和51)			・北側裾部	・東側裾部		・周濠	市報告書第3冊
第3次	1980年 (昭和55)	(結晶片岩・管玉)	・埋納施設の見つけ	・西側くびれ部の上段斜面				市報告書第8冊
第4次	2003年 (平成15)				・前面裾部の基底石		・外周の南辺	市報告書第46冊
第5次	2004年 (平成16)				・南西隅、西側裾部の基底石 ・西側の中段平坦面と埴輪列	・西側造り出しの見つけ	・周濠	市報告書第47冊
第6次	2005年 (平成17)	(結晶片岩)		・西側くびれ部の裾部 ・北西側裾部	・西側裾部の基底石	・西側造り出し北辺の基底石	・周濠	市報告書第48冊
第7次	2006年 (平成18)				・東側の上段斜面、中段平坦面 ・西側裾部の基底石		・周濠	市報告書第50冊
第8次	2007年 (平成19)	(竜山石)	(鉄製農耕具)	・西側くびれ部の上段斜面の基底石、中段平坦面 ・西側裾部	・東側の中段平坦面と埴輪列		・外周の南西部	市報告書第52冊
第9次	2008年 (平成20)	(結晶片岩・石英斑岩)		・北側下段平坦面と埴輪列 ・南東側下段平坦面と埴輪列		・東側造り出しの見つけ	・外周の南東辺、南辺	市報告書第54冊
第10次	2009年 (平成21)		(石製模造品)	・東側くびれ部の下段平坦面と埴輪列 ・北西側裾部		・東側造り出し周辺の礎敷	・外周の南辺	市報告書第56冊



(凡 例)

- |   |             |   |                                 |
|---|-------------|---|---------------------------------|
|  | 古墳各段の復元線    |    | 埴輪列の復元線 (※ 復元線は平成22年時点の復元案に基づく) |
|  | 今回の調査区      |    | これまでの調査区                        |
|  | 葺石・礫敷または転落石 |    | 埴輪列                             |
|   |             |  | 副葬品埋納施設                         |

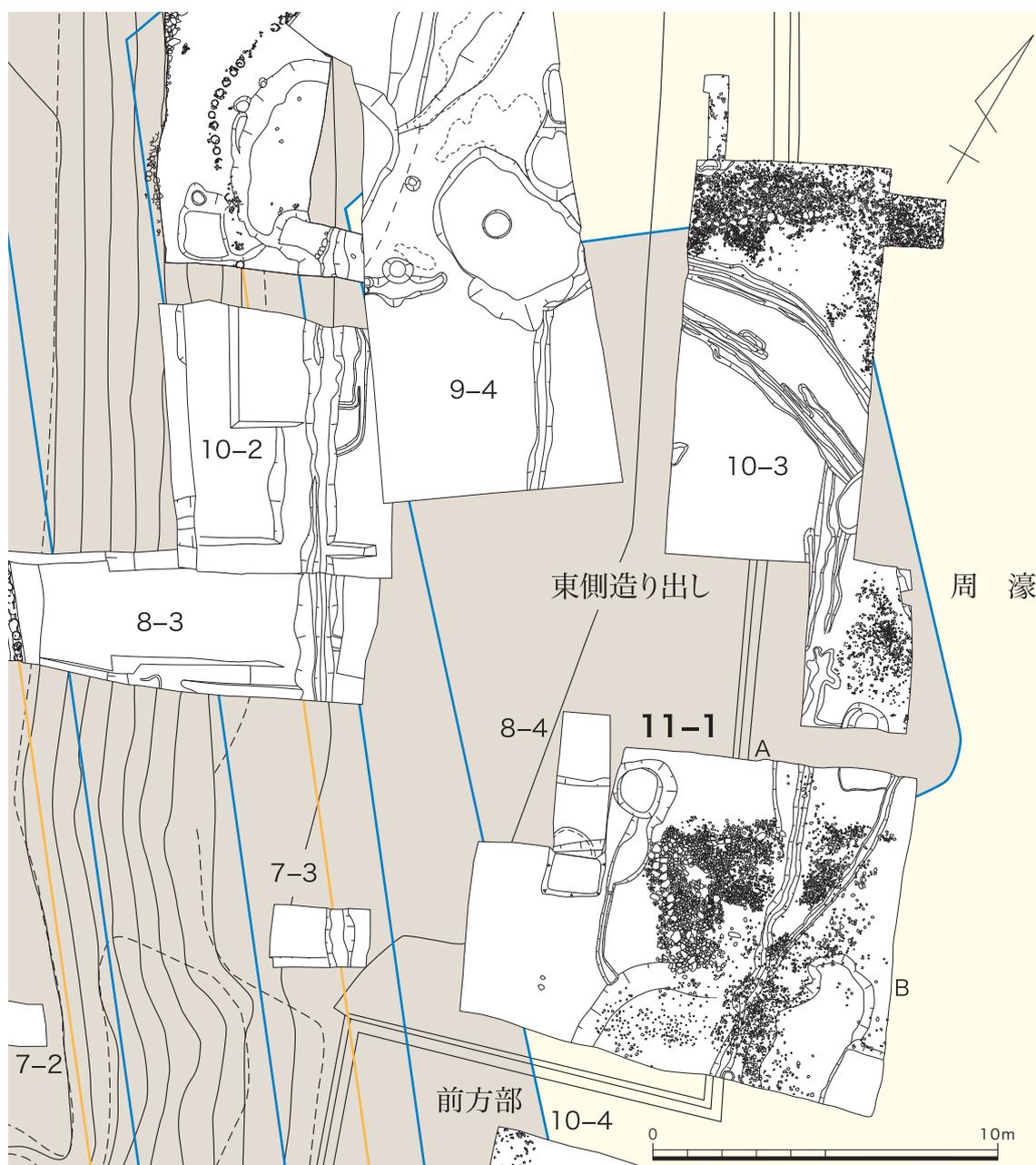
4. 恵解山古墳の調査区配置図 (1/1000)

### 3 第11次調査の成果

#### 第1区

東側造り出しは第9・10次調査で存在が確認され、造り出し周辺に礫敷を伴い、西側造り出しより一回り大きいことなどが分かっている。第1区は想定される東側造り出しの南辺に設定し、造り出しの規模を明らかにすることを目的に調査を行った。

**周濠** 第1区ではグラウンド盛土などの下に、旧表土および旧耕作土・床土が認められた。周濠は調査区の東部域で確認しており、埋土上層の灰色～灰黄色弱粘質土と下層の暗灰色粘質土を経て、地山である灰白色粘質土の周濠底部に至る。周濠底部の標高は14.6 m前後、現地表面



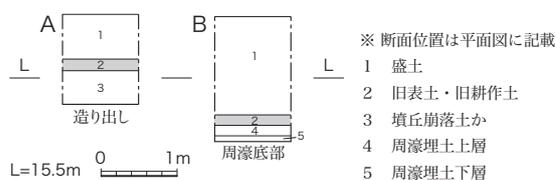
5. 第1区周辺平面図 (1/200)

から周濠底部までの深さは約 1.7 m を測る。周濠底部は第 2 区の西側造り出し接続部と比較して 0.2 m 程度低く、第 4 区とほぼ同じ高さであった。出土遺物は、主に埋土の上層から中近世のものが、下層には長岡京期前後と古墳時代のものが含まれていた。

**東側造り出し** 当初、第 1 区北辺で多量の礫を検出したため、調査区を北側へ拡張して東側造り出しの追求を行った。その結果、拡張範囲を含めた第 1 区のほぼ中央部で造り出し南辺の基底石を検出し、造り出しの規模が南北幅約 18 m、周濠への張り出しが約 14 m であることを確認した。ただ、後世の大規模な墳丘の改変や水田耕作によって、推定される前方部との接続部分には基底石や礫など、造り出しを復元するための手掛かりが残されていなかった。一方、造り出しの東側も耕作に伴う段差や溝で削平を受けているが、後述する造り出し周辺の礫敷が僅かに残っており、その範囲を推定することができた。第 1 区で検出した造り出し上面の高さは標高 15.1 m 前後であり、第 10 次調査第 3 区の南端における検出高とほぼ同じであった。

**造り出しの基底石と葺石** 造り出し南辺の基底石は東西約 4 m 分を検出した。基底石には長軸 10 ～ 40 cm の石材が用いられており、小振りな基底石が配された西側部分では、その内側にほぼ同じ大きさの石が配置されていた。一方、斜面の葺石は、基底石の底部から約 0.15 m までの高さが残存していた。

基底石上面の高さは標高 15 m 前後で、東側



6. 第 1 区柱状断面図 (1/100)



7. 第 1 区全景 (南東から)



8. 第 1 区全景 (北西から)



9. 礫敷範囲内の区画石列（北西から）

造り出し北辺の石列に比べ 10 cm 程度高い位置にある。また、造り出しの北辺では石列に扁平な石材が用いられ、石列の内側にも平坦に施された礫敷が確認されるなど、今回検出した南辺とは状況がやや異なっていた。

**造り出し周辺の礫敷と区画石列** 周濠の底部には拳大までの礫が広範に分布するが、礫は基底石の外側約 4 m までの範囲がとくに密な状況であった。礫敷は東側造り出しの北辺、東辺でも確認されており、造り出しの周囲を州浜状にするため施されたと考えられる。

礫敷の西側で北西から南東方向に延びる区画石列を検出した。区画石列は南辺の基底石との接続部である北西端を起点に約 4 m までを確認したが、南東部は後世の削平によって失われていた。ただ、南側の第 5 区では区画石列の延長部が認められないため、礫敷範囲内で終息するものと推測される。区画石列には長軸 15 ~ 40 cm の石材が用いられ、造り出



10. 東側造り出し南辺の礫敷（東から）

しの基底石に比べ大きな石材が目立つ。しかし、石材は長軸を斜めに配するものが多く、その配置状況は粗雑な印象を与える。石列の西側にも礫敷が続くことから、区画石列は礫敷内を区切るために設けられたと考えられる。

第1区南部には前方部東側裾部が想定されていたが、墳丘外表は削平によって完全に失われていた。しかし、この部分は第5区の基底石下端に比べ約0.5 m高い状況であった。このことから、東側造り出しの南接続部は、区画石列の西側に一段高い部分が付加される複合的な形態であった可能性を指摘できる。

**埴輪** 第1区では、区画石列より東側の礫敷部分で多くの埴輪が出土した。普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪の他に形象埴輪があり、形象埴輪では水鳥・蓋・壺・家形を確認している。水鳥形埴輪は恵解山古墳における初出例で、頭部～頸部片の他に尾羽・脚・翼・体部の破片がある。頭部～頸部片は残存高が約17 cm、<sup>くちばし</sup>嘴先端までの長さが約12 cmを測り、平らな嘴と白目が線刻で、黒目は刺突で表現されている。頭部～頸部は中空で、外面には密なハケ調整が施されていた。脚部片は突帯上面に線刻で表現したものが1対あるが、体部下半の表現は定かでない。翼は別作りであるが、その表面に線刻は認められなかった。

水鳥形埴輪は大きさの異なる複数個体がセットで配されたとする考察がある。第1区では突帯上面に脚状の線刻を施した破片が他に1個体あり、複数の水鳥形埴輪が配置されていた可能性が高い。水鳥形埴輪は破片の全てが区画石列中央部の東側、3 m四方の範囲から出土しており、東側造り出し接続部付近の区画石列や州浜状の礫敷を意識して配されたものと考えられる。



11. 水鳥形埴輪出土状況（南東から）



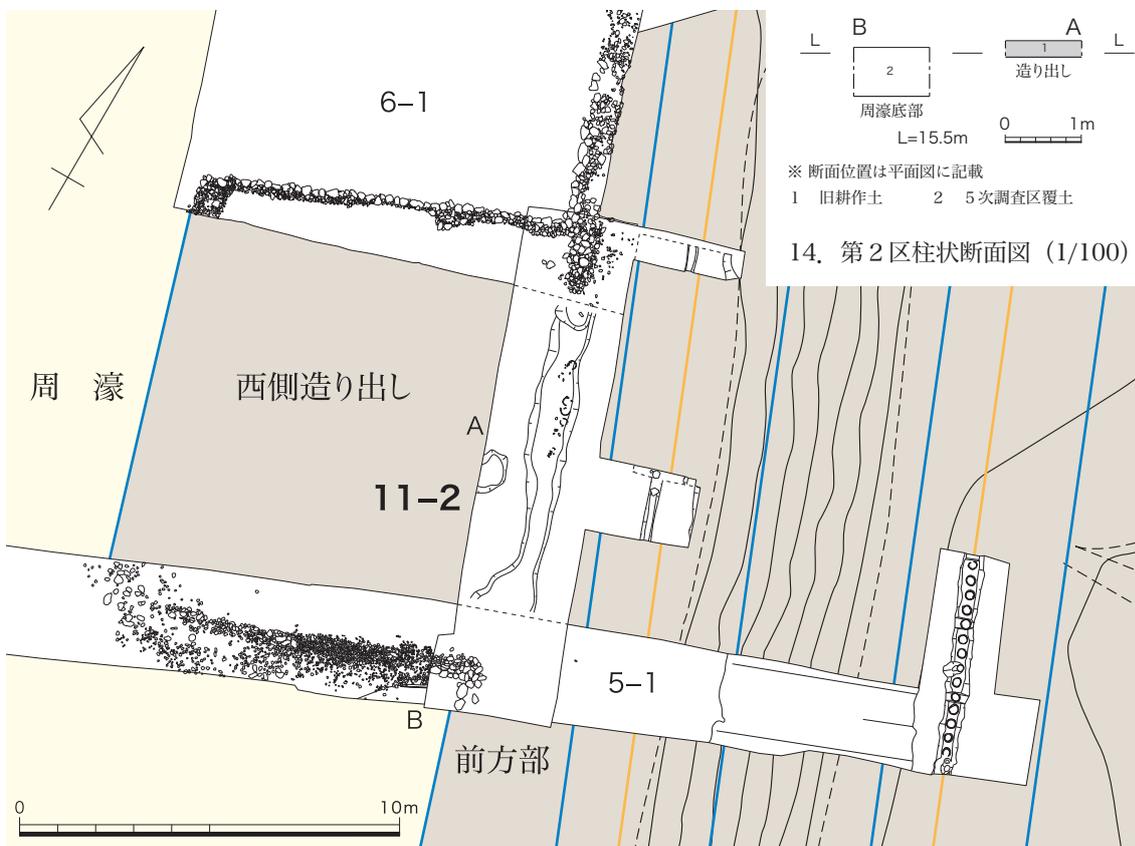
12. 埴輪出土状況（東から）

## 第2区

第2区の調査対象である西側造り出しは、第5次調査で初めてその存在が明らかにされた。第6次調査では造り出しがくびれ部から約6m離れた位置に接続し、接続部の幅約12m、周濠への張り出しが約10mであることが確認され、また、造り出しの北側接続部で葺石が谷状を呈する状況が検出されている。本調査では、谷状の葺石や造り出し接続部の状況を明らかにする目的で調査区を設定した。

**溝状遺構と埴輪列** 第2区では、厚さ0.2m前後の旧耕作土を除去した段階で西側造り出しの盛土が表れる。調査の結果、第2区のほぼ中央、西側造り出しの接続部において、第6次調査の谷状を呈する葺石から南に延びる溝状遺構を確認した。溝状遺構は幅0.6～1.1mを測るが、深さは10cmまでの非常に浅いものであった。溝状遺構内の北半部では、原位置を保つ埴輪基部を4基確認した。4基の埴輪は、溝状遺構の底部東側（前方部側）に沿って直線的に並ぶことから、西側造り出しの上面に設けられた埴輪方形区画の一部と考えられる。

埴輪の底部径は北側の3基が20～22cmで、これまでの調査で確認されている後円部、前方部平坦面埴輪列のものとほぼ同じ大きさであった。それに対し最も南側の1基は底部径が15.5cmと一回り小さく、また、器壁が他の3基に比べてやや厚手であることから、形象埴輪の基部とも考えられる。なお、いずれの埴輪も残存高は7cmまでであり、後世の耕作などの影響を免れ、辛うじて残されたものであることが分かる。



13. 第2区周辺平面図 (1/200)

**西側造り出しの構造** 西側造り出し上面の高さは、現状で北側の周濠底部より0.4 m程度高い。今回、方形区画の埴輪列を検出したことで、造り出し上面の高さを具体的に推定することができた。すなわち、埴輪の基部を完全に埋没させた場合、想定される西側造り出し上面の高さは標高約15.7 mとなる。周濠底部は標高15 m前後であり、西側造り出しは周濠底部との比高差が約0.7 mの低い形態に復元できる。

西側造り出しの構築手順は、まず前方部の側面を含めた範囲を掘削し、その後、改めて前方部側面を盛土で成形し、最後に前方部と異なる土で造り出しを付加したと考えられる。今回、造り出し接続部で溝状遺構を確認したことから、基底石・葺石の施工前に造り出し接続部に溝状遺構を掘削し、その後に基底石・葺石・北側接続部の谷状部分の施工や造り出し上面・溝状遺構内への埴輪の配置が行われたと考えられる。

**造り出し南接続部の基底石** 第2区では西側造り出し南辺部分の再調査を行い、南側の接続部と造り出し南辺の基底石を4石確認した。西側造り出しの基底石は長軸20～30 cmを測り、前方部の基底石に比べると一回り小さな石材が用いられている。石材は長側辺を外側に向けて配置され、前方部との接続部付近では、その内側にほぼ同じ大きさの石が複数配されていた。造り出し斜面の葺石は、長軸10 cm程度の石材を用い、小口を突き刺すようにして施工されている。

**出土遺物** 第2区では、前述した埴輪列以外の出土遺物は少量で、その大部分が造り出し南接続部付近の周濠埋土や転落石を含む堆積から出土している。



15. 第2区全景（北から）



16. 西側造り出しの埴輪列（南から）

### 第3区

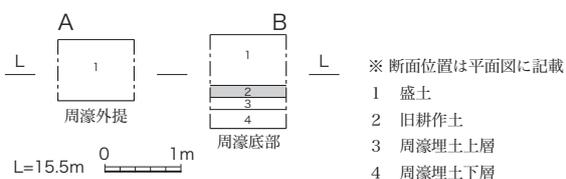
恵解山古墳では、これまで後円部の周濠外堤に関する資料が不足していた。本調査では、推定される後円部の裾部から北へ約 22 m の位置に調査区を設定し、周濠外堤の検出に努めた。なお、第3区の南半部では、第2次調査E-II区の可能性ある攪乱坑を確認している。

**周濠** 第3区は全域にグラウンド盛土が施されている。北半部はグラウンド透水管や排水ポンプによる攪乱を受けていたが、南半部では旧耕作土・床土の下で周濠埋土を確認することができた。周濠埋土には、上層の黄灰色～褐色粘質土と下層の灰色粘質土・黒灰色砂質土があり、周濠底部である黄灰色の地山に至る。周濠底部の標高は 14.8 m、現地表面から周濠底部までの深さは約 1.3 m であった。出土遺物は少ないが、主に周濠埋土の上層から中近世のものが、下層からは長岡京期前後と古墳時代の遺物が出土している。

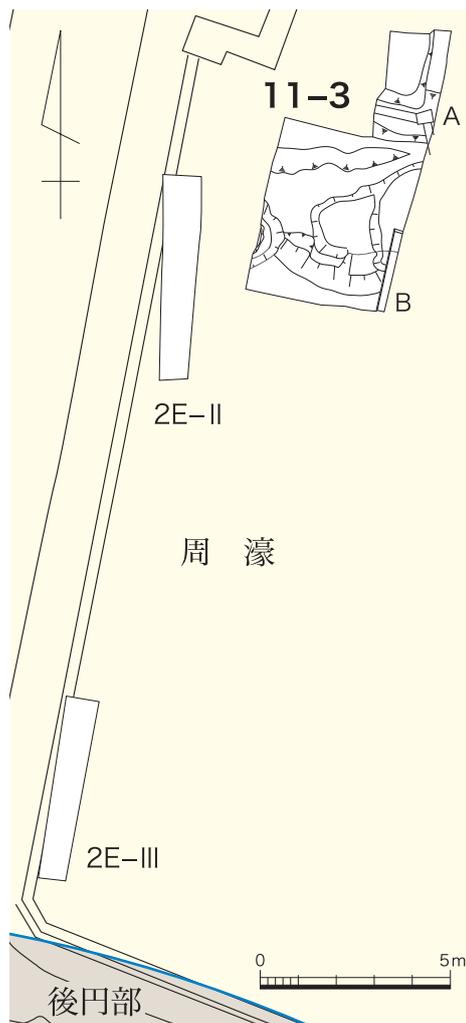
**周濠外堤** 周濠底部の地山は、第3区の南辺から緩やかに立ち上がり、ほぼ中央部で平坦となる状況を確認した。後世の削平のため本来の高さは分からないが、この部分に後円部の周濠外堤を想定できる。周濠底部から外堤への傾斜角度は 11°前後であり、現状での周濠外堤の高さは 0.4 m、標高 15.2 m を測る。周濠外堤の上端から推定される後円部の裾部までの距離は約 21 m であった。ただし、第3区は狭小であり、後円部周濠の円弧や外堤の状況を明らかにするには、より広範な調査が必要と考えられる。なお、外堤の斜面を含め第3区では礫の分布は認められなかった。



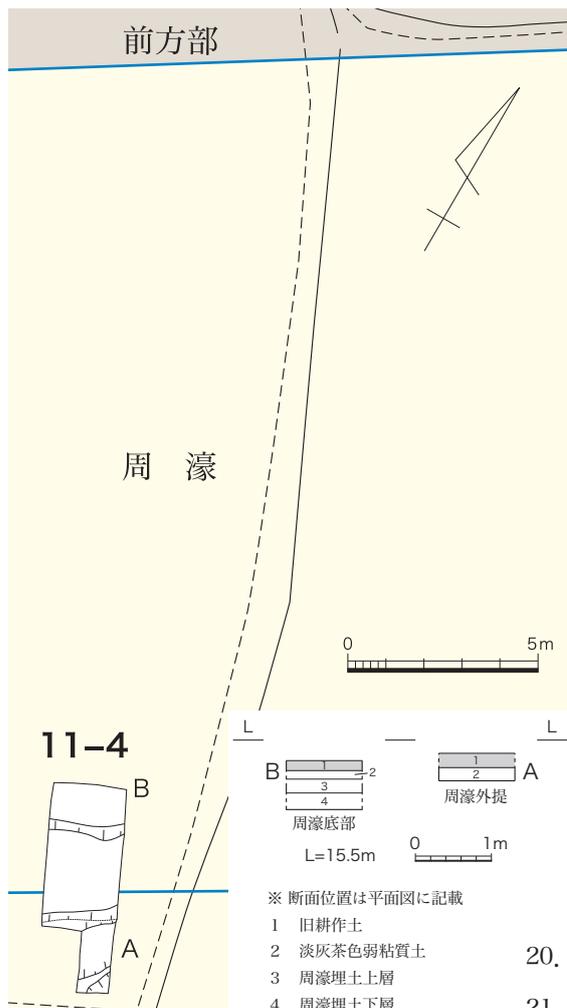
17. 第3区全景（北西から）



18. 第3区柱状断面図（1/100）



19. 第3区周辺平面図（1/200）



22. 第4区全景（南から）

20. 第4区周辺平面図（1/200）

21. 第4区柱状断面図（1/100）

## 第4区

周濠外堤の南辺を確認する目的で、前方部前面の裾部から南東へ約 22 m の位置に設定した。

**周濠** 現在の表土である旧耕作土と灰茶色弱粘質土の下で、灰褐色弱粘質土の周濠埋土上層と黒灰褐色粘質土の埋土下層を確認した。地表面から周濠底部までの深さは約 0.7 m で、底部の高さは標高 14.6 m を測る。後円部北側の第 3 区と比べて 0.2 m 低いだけで、恵解山古墳の周濠がほぼ平坦に造成されていたことが分かる。出土遺物は、周濠埋土上層に中近世のものが、下層の黒灰褐色粘質土には平安時代以前の遺物が含まれていた。

**周濠外堤** 第 4 区北半部から周濠底部が緩やかに立ち上がり、中央部で周濠外堤の上端に至る。外堤への傾斜角度は 12° 前後であり、周濠底部から外堤までの高さは 0.4 m で、上面の標高は 15 m を測る。なお、外堤斜面には第 4 次調査第 1 区のような礫の分布は認められなかった。

## 第5区

第 5 区は、前方部東側裾部の状況を確認するとともに、東側造り出しの南辺で検出した区画石列の性格を明らかにする目的で、第 2 次調査 G-I 区と重複するように設定した。

**周濠** グラウンド盛土の下は、全域に旧耕作土が認められる。周濠は東西幅約 6 m にわたって確認した。周濠埋土には、上層の茶灰褐色弱粘質土、下層の黒茶褐色粘質土があり、周濠底部

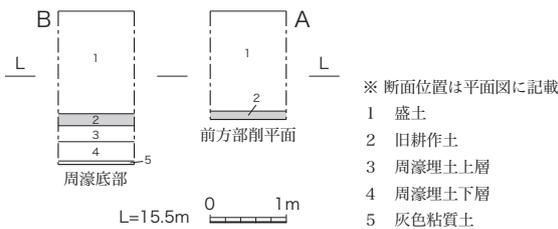
である灰色粘質土に至る。この灰色粘質土は厚さが3 cm程度しかなく、基底石付近の断面観察では基底石を据えるために施された青灰色粘質土を覆う状況が確認できた。今後の検討を要するが、灰色粘質土は周濠底に貼られた土とも考えられる。周濠底部の標高は14.4 m、現地表面から周濠底部までの深さは約2 mであった。なお、第5区の周濠底部では東側造り出しの周辺に施された礫敷や区画石列に関連するものは確認できなかった。

**第1段斜面** 周濠内には幅約2.5 mの範囲に転落石が分布しており、その範囲の縁辺には比較的大きな転落石が認められた。第1段斜面は、転落石分布範囲の西端から最大で幅約1.3 mを検出した。第1段斜面の裾部では9石の基底石を検出しているが、その検出位置は、前方部の西側裾部と推定される古墳主軸を東に反転した線より約0.2 m周濠側にあった。誤差の要因には前方部裾部の出入りや周濠底から第1段平坦面までの高低差の反映、あるいは東側と西側における前方部裾部の形態差などが考えられる。また、前方部裾部の角度も西側に比べてやや開き気味であり、今後、復元案の再検討や前方部南東隅における追加的な調査が必要と考えられる。

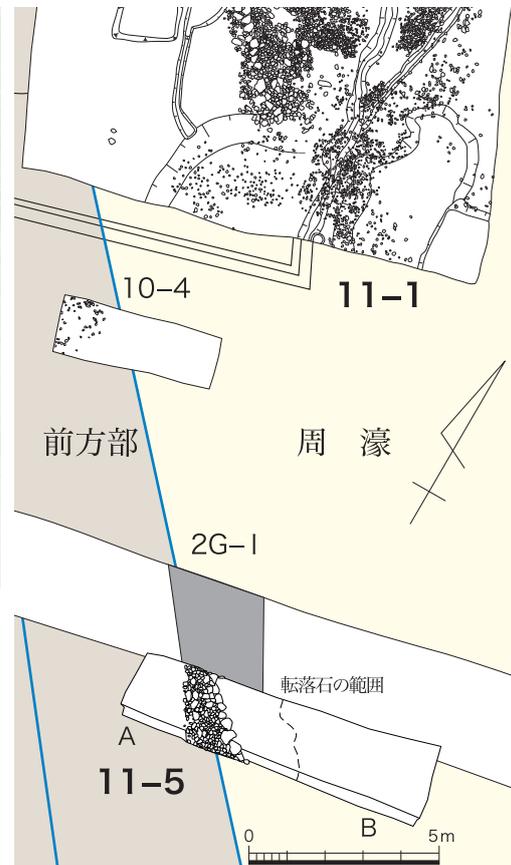
**基底石と葺石** 基底石には長軸30～50 cmの石材が用いられており、なかでも南側の3石はこれまで恵解山古墳で確認された基底石でも比較的大きな部類に属する。いずれの基底石も青灰色粘質土の上に石材の長側辺を周濠側に向けて配置されていた。また、北半部の小振りな基底石3石には、その内側にほぼ同じ大きさの石が配されている。第1段斜面の葺石は比較的残りが良く、基底石底部から約0.5 mまでの高さが残存していた。斜面の葺石が確認された他の調査区と



23. 第5区葺石確認状況（北東から）



24. 第5区柱状断面図 (1/100)



25. 第5区周辺平面図 (1/200)



26. 第1区出土の水鳥形埴輪

同じように、この部分においても長軸15 cm前後の石材を用い、小口を墳丘に突き刺すようにして施工されている。斜面の葺石では、斜面に直交する方向の石列1条、斜行方向の石列1条の他、基底石の底部から約0.4 mの高さで斜面に並行する方向の石列1条を確認した。なお、基底石下端の高さは標高約14.5 m、第1段斜面の傾斜角度は17°前後であった。

## 4 ま と め

本調査では、東側造り出しにおいて南辺の基底石を検出するとともに、区画石列を伴う礫敷の状況を確認した。また、西側造り出しの接続部では溝状遺構と方形区画の埴輪列を、前方部の東側では裾部の基底石を検出し、さらに、周濠部では後円部北側と前方部南側の外堤を確認するなど多くの成果を収めることができた。

とくに、東西の造り出しは、規模や形態、周囲の状況などが大きく異なっており、恵解山古墳で行われた祭祀における役割や機能の違いを示すものと考えられる。また、東側造り出しの水鳥形埴輪は、恵解山古墳の埴輪構成上の欠落を一つ埋めることができただけでなく、礫敷範囲内の区画石列付近に配置されていた状況を推測し得たことに大きな意味があったと言える。

これまでの発掘調査で得られた情報は、それぞれが恵解山古墳の性格を反映したものであり、古墳の復元整備において十分に生かされるだろう。また、恵解山古墳という乙訓地域を代表する古墳の情報は、畿内中枢部の古墳や他地域の首長墓との比較検討を行うことで、古墳や埴輪、副葬品の変遷、地域の特性など、古墳時代の社会を明らかにするための重要な資料になり得るものでもある。

報告書抄録

ふりがな	いげのやまこふんだい 11 じちょうさのかいよう
書名	恵解山古墳第 11 次調査の概要
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 60 冊
編著者名	中島皆夫
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒 617 - 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いげのやまこふん 恵解山古墳	きょうとふ 京都府	26209	200	34° 54' 39"	135° 42' 02"	20100607	242 m <sup>2</sup>	保存整備
ながおかきょうあと 長岡京跡	ながおかきょうし 長岡京市		107					
みなみくりがづかいせき 南栗ヶ塚遺跡	1206-1 他		103			20101209		

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恵解山古墳 (第 11 次)	古墳	古墳時代	東側造り出し(州浜状の礫)、西側造り出し(埴輪列)、周濠北・南外堤、前方部東側裾部	円筒埴輪、形象埴輪	東側造り出し周辺の礫敷から水鳥形埴輪が出土、西側造り出し上の埴輪列
長岡京跡 (右京第 1001 次)	都城	長岡京期		土師器、須恵器、瓦	
南栗ヶ塚遺跡	集落	江戸時代以降	溝、井戸、土坑、段差	土師器、須恵器、瓦器、陶磁器	

## 恵解山古墳

— 第 11 次調査の概要 —

長岡京市文化財調査報告書 第 60 冊

平成 23 (2011) 年 3 月 28 日 発行

編集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター  
〒 617 - 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1  
電話 075 - 955 - 3622 FAX 075 - 951 - 0427

発行 長岡京市教育委員会  
〒 617 - 8501 京都府長岡京市開田一丁目 1 番 1 号  
電話 075 - 954 - 3557 FAX 075 - 954 - 8500

印刷 ヨシダ印刷株式会社  
〒 604 - 8277 京都府京都市中京区西洞院通り御池下ル  
三坊西洞院町 572 NOA 高松殿ビル  
電話 075 - 252 - 5421 FAX 075 - 252 - 5423